



Title	韻文翻訳の問題 : H.H.H. : THE MANYOSHUの完成に因 んで
Author(s)	森沢, 三郎
Citation	大阪外大英米研究. 1968, 6, p. 1-16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98973
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

韻文翻訳の問題

——H.H.H.: THE MANYOSHU の完成に因んで——

森 沢 三 郎

本号は甲元健雄教授大阪外大退官記念号に当てられるそうで、編集者から懇切なお誘いを受け私も一応の文責を果たしたと思います。いまさし当って書いて見たいことは英文科、英文学科（あるいは英米文学科）という名のついた所での「文学と語学との間」ということですが、それはすでに他の方に約束済みの形になっているのみならず、「外国語学部英語学科」よりもむしろ「文学部英文学科」の刊行物により適切な題目のようにも思われます。その上つい先ごろ本多平八郎教授の畢生の大業である THE MANYOSHU— A NEW AND COMPLETE TRANSLATION の刊行という歴史的イベントがあったので、なんとしてもそれに触れないわけにはまいりません。

思えば私の大阪外大生活の後半（戦後の部）は主として本多、甲元両先生の中に挟まれたあぶなげな数年間であり、その以前まだ大阪外国語学校（あるいは外事専門学校）といった時代、故老田三郎教授の来任される前の数年間も上田畔甫教授のあとを受けて私が一応「英語部主幹」ということになっていたので、通算すると必ずしも短い時間ではないが、生来の疎懶と非力とにより単に時間的にその間の空隙を満たす役を果たしたというに過ぎないのは慚愧の至りです。

慚愧ついでに、今回のご依頼に対しても甚だ易きに就くようですが、両教授への通信という形で走り書きしたものをとりあえずお送り申し上げますから、もしそれでもお間に合えばご使用いただきたく、ご取捨は全くご自由をお願い申し上げます。

甲元健雄様

外大でのおつきあいは昭和20年3月貴先生がフィリピンの軍務からご帰国になった時からですが、やがて戦争が終って高槻で授業が始まると第一に強烈な印象を受けたことは、戦後おたがいに明日の糧の思いにおびえる中で、貴先生が講義はもちろん、兼修（教養課程）の講読に対しても真剣な努力をもって周密な準備をせられることで、「この語句は深瀬先生はこのように工夫して訳された」というような思い出話もしばしば承ったように思います。従って、ご自身も工夫に工夫を重ねてなお満足されない風で、そのことは学生仲間でも評判になっていたようです。恐らく、すぐにでも翻訳として出版し得る程度に練り上げた訳文が準備されていたことでしょう。私のように出たとこ勝負の悪癖が固まってしまったものには、とてもついて行けない感じでした。

本誌の前号で貴先生は私のことに触れ「森羅万象みな英語」というような珍らしくオーバーなお言葉を吐かれましたが、私としては各言語の *genius* に従うというか、それぞれに固有な森羅万象の割り方になじむというか、そうした気持から語学の教室でもしばらく原語のままで色々ころがせて見る——たとえば *paraphrase* というような——ことを奨励したことは事実で、これがドイツの外国語教授専門家の間でいう “*get into the language*” という趣旨に添うことだと思っていました。しかし最近、外国語教授法ということを中心として欧米を廻って来たある方に何うと、現在ドイツでは “*getting into the language* のために教室での翻訳に重きを置いている” ということを力説していたそうです。この場合は国語と外国語とのそれぞれのあり方について「深く考える」というくらいの意味でもありましょうか。ヨーロッパの外国語学修の一般的な行き方のように、極めて卑近な日常の実用的 *vocabulary* など先づ *orally* に修得している場合と、わが国のように今でも「受験英語」に特別な *weight* がかかっている国柄とでは一くちには言えないでしょう。

やや議論めきましたが、幸いにあの当時の学生は、この両面のやり方から吸

収すべきものを吸収し、社会の種々の要求に対応する力を養ってくれたように思います。この点で貴先生と私とはお互に相補う姿で、案外よきコンビであったと思うのですが、こんなことを申すのは生意気でしょうか。

本年度の初めからはお宅に近い橘女子大学の英文学科に初代の科長としてご赴任になったので、ご通勤すなわち朝の散歩という好ましい状況のもとお慕いのことでしょう。定年までの多くの年月を残して大阪外大を去られることについては、ご家族や旧師の方からも反対があったそうで、そうした方々の大阪外大に対する肩入れに対しては出身者として私も感謝しますが、ストレスということから言っても結局これが貴先生のために良かったと思うようになりました。往復4時間を通勤に費すよりは、その時間を太陽の光のもとにいたいということは、ヒッピー族には限らず、正常な人間の正常な希望だと思います。

私もいま「英米文学科」というものの綜括的責任を持たされた形になって見ると、（学生自体のバックグラウンドということもそれと無関係ではありませんが）いつの間にか貴先生の手法に近寄り 西施のひそみに倣うという喩えにはまりこみそうですが、時々まとめ上げた訳のようなものを示して学生の参考に供することもやり始めています。それも大がいは英詩の教室に限ってのことです。詩と言えば大阪外大ではあまりにも顕著な専門家の本多先生が儼としていられますので、なまじっかなことは言えず、教室では *light verse* のほかはついにやらずじまいでした。

もっとも、近ごろ方法を変えたと申しまして、三つ児の魂は百までとやら、詩の場合でも先ず純粋に詩的な表現を書き改めた *plain sense* を散文として綴るという作文的な操作を行うことを第1の仕事とします。もっともそれには当然限界があり、たとえば Blunden が “a little less of a grammatical mystery” であることを望んでいられる Dylan Thomas の詩などはいく分あと廻しにしたい気持です。もっとも Blunden 自身もいっているように Thomas のような詩人においてはそんなことは少しもマイナス要素にはならず、かえって若い学生に魅力と親しみを感じさせているらしいことも楽しいことの一つで

す。

でそうした野暮な文法ざた，作文ざたがひと通り終ったあとで，時々「英詩和讃」と名づけるものを示しているのが今の実状です。「讃」という以上「訳」であることを要せず，原詩の一鱗半甲でも示し得ればという願いをこめてのものです。こんな行き方には強い批判があることは承知していますが，本多の大人の奨励を受けていることをも申し添えます。その手始めに極めて短いもの，例えば epigram や epitaph の類を取上げます。

A VAIN HOPE

Swans sing before they die-- 'twere no bad thing
Should certain persons die before they sing.

S.T.Coleridge

白鳥の竟(?)の歌こそいみじけれむしろ失せなむ歌なくて人

TREASON

Treason does never prosper: what's the reason?
Why, when it prospers, none dare call it treason.

Sir John Harrington

謀叛はも絶えて榮えず榮えなば謀叛とあえて言ふ人あらし

これらは原文の短いためにあるいは一種の「訳」とも言えるかも知れませんが，多くの場合はそうはゆかず，ほんの一部だけを捕えたものになります。

Great things are done when men and mountains meet:
This is not done by jostling in the street.

W. Blake

おほいなる業は成さるるあしびきの山と人とのあひ触るるとき

But be his my special thanks,.....,
Who saw life steadily and saw it whole.

M. Arnold

むらぎもの心鎮めて人の世の姿あまねく見きはめし人

nature red in tooth and claw

A. Tennyson

おのもいのち生きむと鳥けもの爪くちばしを赤き血に染む

Man's inhumanity to man

Makes countless millions mourn.

R. Burns

人の人に加ふる非道なげかひて世を経る人の数を知られず

バーンズと言えば、かれの **A Red, Red Rose** の中の *Till a' the seas gang dry, my Dear/ And the rocks shall melt wi' the sun.* のところを「君が代は千代に八千代にさざれ石の……」に比している方もありますが、おなじ喩えるならば吉井勇の「君に誓ふ阿蘇の煙は絶ゆるとも万葉集の歌亡ぶとも」に比した方がもっと適切ではないでしょうか——吉井勇調の好き嫌いは別問題として。

話しが横にそれましたが、バラの続きとして *Golden Treasury* の LXX にある詠み人知らずの

A DILEMMA

Lady, when I behold the roses sprouting

Which clad in damask mantles deck the arbours,

And then behold your lips where sweet love harbours,

My eyes present me with a double doubting:

For viewing both alike, hardly my mind supposes

Whether the roses be your lips, or your lips the roses.

は次のようなことでお茶をにごしたく思います。随分と端折ってはいますが。

「くれないのバラのつぼみと吾妹子(むすめ)が丹(に)の唇とひと時に眼に触れしかば見分けかねつも」

これではルー・ジュを奨励するようにも取られる恐れがありますが婦人の口もとの美しさを花卉に雪の落ちこぼれた赤いバラに喩えるのは Tudor 朝のおきまり文句であることを陳弁すれば、それ以上追究されることもないでしょう。

もう少し長いのでは、たとえば Shelley の Sonnet

Ozymandias

I met a traveller from an antique land,
Who said: Two vast trunkless legs of stone
Stand in the desert. Near them, on the sand,
Half sunk, a shattered visage lies, whose frown
And wrinkled lip and sneer of cold command
Tell that its sculptor well those passions read
Which yet survive, stamped on these lifeless things,
The hand that mocked them, and the heart that fed:
And on the pedestal these words appear:
‘My name is Ozymandias, king of kings:
Look on my works, ye Mighty, and despair!’
Nothing beside remains, Round the decay
Of that colossal wreck, boundless and bare,
The lone and level sands stretch far away.

P.B. Shelley

など次のようなことで軽くおつき合いしようというのです。

崩え著(と)く沙漠の上に転がれりファラオの貌を刻める巨石

古へに威を振ひけむ王の像沙漠に低き台座をとどむ

風化せし文字をたどれば言ふらしも「王に王たる吾(め)ををろがめ」と。

原詩は略しますが、Keats の *Ode on a Greian Urn* からは、

耳に聞くしらべ妙(た)なりしかれども聞こえぬしらべいやまさりけり

美はも真、真はも美とし君知れりそれよりほかは知らずともよし

Wordsworth の *Daffodils* は

千よろづの黄なる水仙重なり合ひそよぎてゐたり池わたる風

金色に水ぎはを埋めてかがよひし水仙いまでも眼(まなこ)閉づれば

これらはあまり断片的ですので、Blunden の作に対して試みた「和韻」を一つお目にかけます。

FROM A STUDY WINDOW

Edmund Blunden

Wave at my window, my green friends,
Sweet summer leaves, till night descends.

Refresh my eyes, release my thought
That moils here like an insect caught.

For you can dance and you can play
With every breeze that comes this way;

For you can meet the lightest air
That passes—then what grace is there !

The sunlight suddenly arrives,—
The diamond sunbeam, it revives,—

And you, good leaves, as soon reply
And wed the sunshine. The wise fly

Comes then and lodges on your breast,
And leaf and light rejoice this guest.

Of nature I know less and less,
But green leaves sometimes let me guess.

書斎の窓より

ブランデン

わが窓にそよげよ夏のひねもすを我の友なる香れる若葉
捕はれし虫のごとくにこの部屋に働くわが目癒やせよ若葉
涼風の吹きゆくごとにゆかしくも躍れる若葉心ゆくべく
日の光及ぶたまゆら若き葉にとまりて遊ぶ小さき蠅見ゆ
海山の遊びも稀になりゆけど若葉を見れば心足らうも

Sonnet の場合、先輩たち「訳」では、努力してきちんと14行に訳したものが多ようです。たとえば Milton の

On His Blindness

When I consider how my light is spent
Ere half my days, in this dark world and wide,
And that one talent which is death to hide
Lodged with me useless, though my soul more bent
To serve therewith my Maker, and present
My true account, lest He returning chide—
Doth God exact day-labour, light denied?
I fondly ask:—But Patience, to prevent
That murmur soon replies; God does not need
Either man's work, or His own gifts: who best
Bear his mild yoke, they serve Him best: His state
Is kingly; thousands at His bidding speed
And post o'er land and ocean without rest;—
They also serve who on'y stand and wait.

J. Milton

は、比較的新しい吉竹教授の訳では次のようになっています。

わが失明に寄せて

かく広き世にして命なお

半ばならず光はや消えぬと悟り、

神には才をもって仕え、帰り来まして

咎(とが)なく、まことを聞えあぐべしと

心逸れど、示ささずば死ぬるかの

才ぞ要(よ)なく宿りいる われと悟りて、

「光なき身に 昼業(ひるご)や強(い)い給う。」

おぞまし 問えば、忍耐は それの呟(ささや)き

受け止めんとて 忽ちに 答えて曰く、

「人の業(ご)天賦を 神は要(い)りまさず

易き軛(く)に耐えてこそ 仕うるなれ。

おん力 大君ぶりや、そのまにま

天使数千 一気に馳する 陸を 海を――

さればただ 侍(は)んべり待つも 仕うるなり。」

Syntax についての多少の疑はこうした韻文の場合問題の外におくべきでしょうが、卒直に言ってこれではあまりにも読みづらいではないでしょうか。

Willem A. Grootaers の説の通り「平均的な読者にとっては、ことばを忠実に追うだけの訳文は、コミュニケーション・チャンネルの荷が勝ちすぎて通りが悪くなる。すなわち読者はすらすらと読めなくなる。だから原文にいったい詰まっている内容は、訳文では平たく薄くし、ことば(記号)をたくさん使う必要がある」。しかしこの方法を採用することは詩の訳としては余り間延びのした索漠たるものになってしまいます。詩的な圧縮を保持しようとすれば、散文の場合以上に読みづらくなるのは当然でしょう。注釈を織り込んだような煩わしさを免がれ、ある程度すっきりしたものにしようとするれば、訳文では大胆に捨てる

ところもあるべきではないでしょうか。斎藤勇教授あるいは繁野天来教授の訳はそれぞれに確に充実したものといえるでしょう。しかし gift の原意や聖書の talent の故事までを訳文に表わす必要性があるのでしょうか。なおこれらの訳と違って Prof. Blunden の注釈では that one talent は eye-sight であると言っており、その他にも、この説を採っている注釈者があるようで、これに反対するは無謀と見えるかも知れませんが、マタイ伝の中の talent の故事には運用して殖やしてゆくべきものとしての偶意があることも事実であります。また “which is death to hide” の “death” 「死罪」と断定する先人の解釈は必ずしも妥当でないようで、ここはむしろ吉竹教授の説に賛意を表します。そうした点を露骨には出さず含みとして扱えば、次のような「和讃」も可能ではないでしょうか。14行の行数だけはとにかく守るようにしました。

盲(め)ひけるときに

いのち半ば光失せつつ
この暗く広き世にして
示さずば枯れなむ才を
むなしくも抱ける我の
おそらくは懈怠(ひた)の罪を
神に得むと心あせりて
「昼業(ひるぎ)をなど強ひたまふ
盲ひし我に」とふともつぶやく。
また思う「否とよ凡そ
人間の才(き)やいとなみ
千よろづの天使を統ぶる
大いなる神に用なし
下されし軛(く)に堪へて
佇ちゐるも真(ま)のつとめ。」

むかしの英詩の手法、たとえば *Patience*（忍耐）を擬人的に用いたような点、はすっかり消し去って、「天意随順」の氣持を日本語に反映させることを旨(め)としました。また句法が重畳している点は一気呵成に押し進む *Miltonic Sonnet* の風を模したものとしてお目こぼしを願います。指摘を待つまでもなくこれではあまりにも多くのものを落していることは十分に認めます。従って別の角度から別様の「和讃」が生れることは当然であり、そうした試みの現われるのを待望すると共に、それらの総和が *Milton* の原作に近い内容なり気分なりを醸し出することを期待するのが「和讃者」の立場であろうかと考えます。

あまりにもひとり合点、ひとりよがりの手紙となってしまいましたが、久濤を叙したい氣持の一端としてご笑覧いただければ幸いです。ご健勝とご多幸をいります。

本多平八郎様

萬葉集全訳とうとう完成されまして、本当にお目でとう存じます。いつぞや朝日ジャーナルの記者が、「顔」のための記事を取りに来て貴先生にお目にかかり、その足で私のところまで来て、たしかに本多さんは第一級の人物だ——ということは「顔」に適格の人物という意味だったと思います——と言って喜んでいました。名は忘れましたがかれも祝杯を挙げていることでしょう。余談にわたりますが、あの時の本多教授の写真は実に見事なものでした。本当に萬葉集と取組むべき相貌でした。序に言えば甲元先生もまた名だたる秀麗なマスクの持主、おふたりの間に挟まれた私が「あれで外大主任教授というツラかよ」というようなイカにももっともな批評の存在を空想して脅かされることもなく済んだのは、天性の樂觀主義によるものと思う他ないようです。

それはさておきおひとりでたゆみなく続けられたこの大事業の進行を約四半世紀の間、ま近で拝見して来たわれわれは、みな心に灯がともった感じです。

北星堂の社長にも心から万才を送り、その出版としての成功をも祈りたいところ。まして貴先生としては、ローマ衰亡史を書き終えペンを投じて号泣したという Gibbon の心境に通ずるものがあることと拝察します。

なお引きつづいてのお仕事もお考えになっていると承りますが、この辺では是非一つご一服なさって下さい。そして久しぶりにご旅行などいかがですか。旅行といえば私は去年の夏10日ほど北海道へ行きました。余談ですが、北海道や東北には大町桂月の足跡が生きており、忘れられた明治の文豪が今や観光的に脚光を浴びているのも意外なことです。私も層雲峡で「層雲峡の名は定まりてかくれなし大町桂月遊びし日より」など、例によってメモ代りの歌を詠みましたが、層雲峡の近くのローソク岩というのを見て、バス・ガイドの言葉を受け売りし「春されば燃えたつ色の山つつじローソク岩の焰をなすと」と、それでも薄手の観光メモを書きつけたことでした。ところが少し日が経ってから、これは来るべき春に関してのことであるから、「春されば」でなく「春さらば」とすべきではないかという疑念をもち、正宗敦夫氏の萬葉集総索引に当ててみました。すると、「…さらば」の用例を10個挙げてありました。これを貴訳の中で採用されている国歌大観の番号に直すと次のようになります。

秋さらば	84,	464,	1362,	2121
夕さらば	121,	744,	2922,	4177
春さらば	1281,	1871,	3786	

今ごろこんなことに気づくのも全くどうかしていますが、萬葉集の全歌に亘りこうした問題も含めて一つ一つ見きわめて、訳をつけて行かれたことを考えると気の遠くなる思いです。しかし国語学の問題もさることながら、このごろは、民族学的、歴史社会学的、などなど広い場面からの知識が集積され、専門家も茫然自失する有様ですが、その間にあって解決すべき問題は数かぎりなくあったに相違ありません。その一つ、開巻間もなく出てくる、難解をもって有名な紀の幸(き)の歌についても随分とお調べになり、最後に私のお目にかけた都筑省吾氏の「萬葉集十三人」の中に述べられた説を採られましたが、その

ことがこの全訳の注記にも載っているのはおなつかしい限りです。

貴先生も大いに信頼され参考にされている窪田空穂氏が、その「万葉集評釈」の第一巻を出された当時詠まれた歌に

「いにしへのこの一歌に立ち来たる面影いふと我は筆執る」

というのがあります。生活に根をおろしたこの短詩型文学においては、その背後にある人間を理解し、作歌の環境や条件を考え、歌い上げられている感情を汲み取らねばなりません。「立ち来たる面影」とはそれらの総てを表わす言葉だと思います。

ましてこれが英訳ともなれば考慮に入れなければならぬ要素ははなだしく拡大します。それに対処しつつ戦中戦後の二十数年間の間、時代の苦しさに堪え抜いてしづかにその熱情を持続されたことは敬服というような言葉では到底言い表わせぬ畏敬の気持を持たされます。

この永いお仕事のあいだ、大方は貴先生に近いデスクに坐り、時折ご苦心の訳稿を見せていただき、見当違いの勝手な感想を述べさせて頂いたり、今ふり返って光榮至極のことと存じます。当然のことながら、完訳を拝見すると、何よりも年月のかかったお作、labour of love の所産であることをしみじみ感じます。“By always thinking unto it” ということの尊さがいま更胸を打ちます。たとえば第十六巻でNo.3794—3802の9首は9人の乙女が老人に答える歌で英訳では概して2行のみから成る verselets ですが、それが見事に自然な押韻をもっています。かって先生は Yeats の次の詩の中で、特にoppressed, guest が意外な押韻をなしていることを賞讃していられましたが、今回のお訳の中にはそれにおさおさ劣らない楽しい押韻がたくさんあることを信じます。

Much did I rage when young,
Being by the world oppressed;
But now with flattering tongue,
It speeds the parting guest.

No.3835の「勝間田の池は我知る蓮なし然か言ふ君が鬢なきが如」の歌は、子規がその歌論の中で「我知る」というような語句を挿入する自在さを古今集と対比して賞讃しているものですが、貴訳では I'm awa.e としてそれを表わし whate'er と韻をふませて目立たせておられます。この歌の作者と伝えられる新田部親王は実は鬢の多い人であったが、友の婦人が戯れに反対を言ったのだという説はおそらく清輔の「袋の草子」が最初で、仙覚に承け継がれ今日に至っています。私もこの婦人のアイロニーに興味を覚えて、かつて試訳を行ったことがあり、お笑い草にここに書つけようと思いをいしましたが、いよいよとなるとさすがに気おくれがして結局無分別を敢行できません。

この歌は貴先生の訳では、詞書きもともども、次のように簡潔に表出されています。

*A nobleman said he saw lovely lotus flowers in Katsumata Pond,
whereat a lady, making this verse, ridiculed him.*

No lotus flower
is found in Katsumata Pond.
Of that I am as well aware
as that you have no beard whate'er.

そのほかの歌についても、一体に最初のころに比して、失礼な申し分ながら、大へん引きしまったものとなっている感じです。たとえば第十九巻の巻末に置かれた「悽惻(かな)める意(こころ)歌にあらずは、撥(は)ひ難し。よりてこの歌を作り、式(い)ちて締結(詰)を展べたり」という辞を伴った大伴家持の三首は、次のような簡単なものになっています。

No. 4290

So lonely do I feel now in the twilight still,
although the field is veiled in mist and songbirds shrill.

No. 4291

In the twilight do I hear the breeze
rustling softly over small bamboo trees.

No. 4291

Pathetic on a vernal day am I,
hearing soaring sky larks sing on high.

これは、(長さに比して) “packed with meaning” であるべき詩としてまことに望ましいことだと存じます。

短いということから言えば萬葉集の中で最初に出て来る短歌(反歌) No. 4 の「たまきはる宇治の犬野に馬竝めて朝ふますらむその草深野」も

The Emperor goes hunting
and horses tread the meadow.

となっており、また No. 2347 の「海小船(結^{あは})泊瀬の山に降る雪のけ長く恋ひし君が音ぞする」は

For long my husband came not here,
but oh! his footsteps now I hear.

となっています。しかしこれははそれぞれ理由のあることで、前者は枕言葉のついた地名、後者は枕言葉に始まる序詞であり、これ以上を表現しようとすれば却って冗長、無意味乃至滑稽のそしりを免がれないでしょう。

Fitz-Gerald の Rubáiyát は漢詩の七言絶句と同じ抑韻をもち^{*}、75篇の詩がそれぞれ措辞の変化を見せていますが、一面 Chesterton の逆説的な “The work is too good to be a good translation.” という批評もある意味では大いに当たっていると思われます。それに対して貴先生のは 75 verses ではなく、実に4500余首を対象とし、何よりも good translation を志向されたものであることは十分にうなずかれます。

* この点原詩もそうだと聞きます。ただし篇数は 200 以上、異本が多くて定めがたいということもいつか貴先生から伺ったように思います。

もっとも good translation と言っても詩の translation である以上、散文の場合に比して遙かに多くの見方が可能であり、種々の角度から種々の訳が成り立つと言えれば向う見ずの放言と見られるでしょうか。という意味は、この立派な本多 MANYOSHU があっても、なほ別の英訳なり欧訳を容れる余地が残されているではなかろうかと言うことです。（全訳の試みは少なくとも今世紀間には出ないでしょうが）。他の訳もあり得るということは貴先生の完訳に暗影を投げるものでは決してなく、かえってその永遠の生命を保証するものだと言えます。

上に貴先生の訳を引用した家持のNo.4291は「わが宿のいささ群竹(け)吹く風の音のかそけきの夕(ゆふ)かも」の訳であります。思うに短歌にはこの風の音よりも更にかすかな趣きを、その消えんとする所に捕えて調べに生かしたという感じのものが多いのですが、それを外国語の意味として成立させている今回のお訳は、その龐大なお仕事の量ということを別としても英詩の作家としての貴先生の証(あかし)となるべき金字塔であることは疑いのないところです。

（付 記）

この稿が印刷される前に本多先生には外務省の委嘱を受けて歐洲の大學を歴訪し、萬葉集に関する講演を行われ、帰朝後は前々から手をつけていられた古今集、新古今集の訳筆を進めていられると承わることは慶賀のいたりです。